



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



心理学から見る「自己」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): behavior, behaviorim, conditioning, social learning theory, split brain 作成者: 前田, 潤, 松本, 敏治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/94

心理学から見る「自己」

その他（別言語等） のタイトル	'Self" Viewing from Psychology
著者	前田 潤, 松本 敏治
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	52
ページ	3-11
発行年	2002-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/94

心理学から見る「自己」

前田 潤*¹, 松本 敏治*²

‘Self’ Viewing from Psychology

Jun MAEDA and Toshiharu MATSUMOTO

(論文受理日 平成14年 8月30日)

Abstract

We state psychological interpretation of "Self" from two aspects in this chapter. First, the mechanism through which environment and intention influence organism's behaviors and responses, are explained in term of Conditioning and Social Learning Theory. Second, the study of "Spilit Brain", which resultant from surgery to patients with severe epilipsy and showed the existence two mind in a human, are introduced.

Keywords : behavior, Behaviorim, Conditioning, Social Learning Theory, Split Brain.

1. はじめに

われわれは自分自身の行動をほぼ自明のものと捉え生活をしている。つまりわれわれはわれわれ自身がなぜそのように行動しているのかをよく知っていると思って生活をしているものである。時に思わぬミスをしたり、自分では合理的な説明のつかない不合理な観念や信念を持っていたとしても、偶然とかたずけたり、懸命にその不合理さに理由をつけて何とか合理的な説明を試みようとすることがある。

自分はなぜそのような行動をするのか、われわれは知りたいのである。しかし、しばしば説明がつかず途方に暮れる。

心理学ではこのような自分の行動の由来や自分自身つまり自己に関わる知見を集積してきた学問分野の一つである。本論では、それらの知見の幾つかを呈示しながら心理学的な立場から自己について考えるための材料を提供してみたい。

*1 共通講座

*2 弘前大学教育学部

2. 学習

我々は様々なことがらを日々学習している。学校の勉強のような教科の習熟だけが学習ではなく、情緒の発達、社会的相互交渉、人格の発達にも学習が関係している。ここでは、そのような学習がどのような心理的メカニズムをもって行われるかを日常の我々の行動を振り返りながらみていくこととする。

2. 1 刺戟と刺戟と結びつける

はじめに、古典的条件付けと呼ばれる学習から見ていくこととする。条件づけあるいは条件反射というとパブロフの犬の話思い出す人も多いと思う。パブロフはもともと消化について研究していたが、その際、実験用のイヌが食器皿を見ただけで、唾液を流すようになることに気づいた。その後、この事実を組織的に研究し、ある刺激（ベルの音など）とエサを同時に提示しつづけることで、ベルの音だけで、唾液を流すようになることを見いだした。このような反応が、人間のあるいは自分の普段の行動とどう結びついているの

かと思うかもしれないが、人間の行動を条件付けだけで説明するのはむずかしいものの、人の行動を考えると、条件づけにもどづく学習は無視できないものである。

われわれは、いろいろな形で二つの出来事をむすびつけている。一方が多方の刺激の前触れになるという場合を考えてみよう。給湯器のゴーという音は蛇口からでる水がお湯に変わる前触れとなり、カギ束のガチャガチャという音は父が職場から帰って来たことを意味するなどである。このように二つの刺激が相ついで生じるという事態を何度も経験すると、その二つの間につながりがあるというふうに捕えてしまう(連合)。

古典的条件付けの中心概念は「もともとは中性刺激(特別の意味をもたない刺激)であったものが、別の刺激と一対でくり返し提示されることによって、その刺激と連合されるようになる」ことである。つまり、いままでとはちがう刺激でも同じ反応を引き出せるようになる。古典的条件付けでは、二つのできごとが相継いで起きるということがくり返され時、前に起きたできごとが後に起きたできごとを予測させる信号となる。イヌにとっては、ベルがなった後で、エサがあたえられるということがくり返されると、このイヌにとって、ベルはエサが来るという前触れになる。エサが出たら唾液分泌がなされるということは特別に学習しなくても生じる反応であり、無条件反応(UCR)とよばれ、その場合のエサは、無条件刺激(UCS)となる。上述の手續(音→エサ)がくり返され、エサ無しで音だけで唾液分泌が起きるようになる。唾液分泌が音に反応するように「条件付け」られたと呼ぶが、この時の唾液分泌は条件刺激(CS)である音に対する条件反応(CR)となる。

2. 2 行動とその結果をむすびつける

前節で、刺激と刺激の関係を学習するメカニズムについて述べた。さらに、人は自分がした行動とその結果についての学習も行っている。ここでは、そのような行動と結果の結びつきの学習のメカニズムを見ていくこととする。

パブロフが見いだしたのは別のもう1つの条件付けとして、オペラント条件づけといわれるものがある。オペラント条件付けで、もっとも有名なのはアメリカの心理学者スキナーが開発したスキナーボックスであろう。レバーを押すとエサ台にエサがでてくる装置のついた四角い箱の中に、空腹のネズミをいれる。この箱にいれられたネズミはしばらくすると探索行動を始め部屋の中を動きまわる。たまたま、レバーを押

してしまうと、エサ台の上にエサが1つころがり出る。空腹のネズミは、エサを食べる。再び、動きまわっているうちに、偶然レバーを押してエサを食べてという経験をjする。そのうち、レバーを押してはエサを食べるという行動が頻発し、空腹がおさまるまでこの行動をつづけるようになる。ネズミは、空腹のときスキナー箱にいれられたら、レバーを押してエサを食べるということを学んだことになる。

このネズミは、自分の行動の結果にもとづく学習を進めた。もし、その行動が報酬をもたらすのであれば、その行動はくり返される。このような場合、正の強化があたえられたという。もし、逆にある行動をした結果、不快な刺激をうけるようなことになれば、ネズミはそのような行動をおこなわなくなるであろう。その場合、罰があたえられたと呼ぶ。

2. 3 生活の中で生じる条件付け

では、このような条件付けにもとづく学習は、わたしたちの日々の生活や活動にどう影響をおよぼしているだろうか。ちょっと可哀相な実験だが、恐怖などの情動を条件付けが可能なことをしめす実験としてつぎのようなものがある。

小さな子どもは、急に大きな音をたてられると吃驚して泣いてしまう。これは、大きな音に対して恐怖反応(無条件反応)である。そこで意地悪だが、あえてつぎのようなことをしてみる。子どもの側に、白いヌイグルミのネズミを置き、子どもが興味をもって触ろうとしたそのとき、いきなり大きな音を立てる。子どもは、大きな音に吃驚して泣きだす。これをくり返すと子どもはネズミをみただけで、泣きだし恐怖におびえるようになる。

もともとは、特別な意味をもたなかったヌイグルミのネズミがいまや恐怖の対象になってしまった。また、特定のヌイグルミのネズミだけでなく、白くてフワフワしたもの全般に対しておびえをしめすような現象(般化)が見られる。

このように、恐怖反応を条件付けで説明することも出来る。しかも、このような恐怖反応はなかなか消えない。多くの人は、恐怖反応や不適切な反応をなんとか克服したいと考えているが、出来ずにいる。多くの場合、人は一度恐怖をおぼえた対象があらわれそうな場面や状況をさけるようになる。そうするとその対象(人や物)がもはや危険でなくなっていたとしても、そのことを学習できない。つまり危険ではないということを学習する機会があたえられないままとなる。

酒、タバコ、食べ物、薬物などの嗜好の一部は学習されたものである。これらの物の摂取は、時に環境刺

戦に対して条件づけられるということがある。喫煙者は、食後や一仕事の後のような特定の状況でタバコを欲するというのはよく聞くである。肥満の人の場合、食事をとる環境が食べるという行動を誘発することが知られている。薬物依存などの場合はより問題は深刻である。以前に薬物中毒の経験をもつ人は、以前乱用していた場所や地域にもどると離脱症状の苦痛を再体験してしまうといわれている。

心理学の世界で、実験神経症とよばれるものがある。互いによく似ていて弁別しにくいような刺激をつかって動物に弁別実験(一方の刺激にだけ反応して、もう一方の刺激には反応しないなど)をさせると、強いストレスを生じさせるらしく、実験が進むにつれて奇妙な反応が生じるようになる。たとえば、丸はエサの合図、楕円はエサがないことの合図を教えるとする。このとき、丸と楕円の差がハッキリしていれば問題ないが、殆ど弁別出来ないほど互いに似せて実験を行う。その後、簡単な弁別課題にもどしてしたところ、適切な反応ができないままとなってしまう。イヌに起きたことは、これだけにとどまらない。この課題を行う前にはおとなしかったイヌが、装置の中でおびえて泣き叫び、泣き声をあげるようになる。その他にも、実験室に対するおびえなどの反応もみられる。ここでみられる状態は、人の神経症の症状とも似ている。

ここには、「長期的な逃れられない葛藤や決定困難なストレス状況」「全般的な不安を示す行動」「普通でない反応や葛藤事態の根本的解決しない反応の表出」「特殊な方法を用いないと、長期間消去しない」など人の神経症の発生条件と類似の状況にある。

2.4 行動を変えるには

いままで、古典的条件付けおよびオペラント条件づけの学習について見てきた。学習した行動はかならずしも適切で社会的に受けいれられたり、本人にとって有意義なものばかりとは限らない。時には、反社会的な行動や叱責をもたらす行動さえも学習によって獲得することがある。クラスで立ちさわぐ子は、教師からの叱責をうけるかもしれないが、それは同時にクラス全員からの注目をあびるという正の強化をうけているのかもしれない。また、やめたいと思いつつもしてしまう行動(喫煙だったり過食だったり)をもっている人もいる。このような行動に対してどのように対処していけばよいのだろうか。これに対する答は、その心理学のアプローチが異なれば、回答も異なる。精神力動的アプローチをとる研究者は、あなたの過食を幼児期や成育上の経験によるものとみなし、埋もれた記憶を掘りおこすことが問題を解決するとみなすか

もしれない。行動主義者は、内面の記憶より過食という行動を規定している外的要因を統制する方法を指導してくれるかもしれない。認知的アプローチをとる人びとは、あなたが外部にある刺激をどのように意味付け捕えているかが重要と考えるかもしれない。また、人間学的モデルでこの問題に接近しようとする人は、あなたが自分自身を的確に把握し人間的に成長し自分の基本的潜在能力を発揮することこそが重要であると考えかもしれない。このように心理学においては、一つの問題に対していくつもの解決法が示されることとなる。

ここでは、人間の行動を変えるにあたって、どのようなものがあるかを具体的に学習という立場から見て行くこととする。

オペラント条件付けの基本的部分は、非常に簡単な図式で既述できる。"ある行動が自発され、それに強化刺激がつづくなら、その行動が生じる可能性は高くなる"とうことであった。ある意味では、現在、くり返し出現している行動は、無条件反射など生得的に獲得されたものを除けば、なんらかの形で学習されたものであると考える。では、その行動は除去したり、別な行動に置き換えることが出来るはずである。

ある反応を起しやすくさせる刺激は、正の強化子とよばれる。あらたな反応を形成したいのなら、その反応に対して正の強化子をあたえるというのがもっとも普通の方法だろう。われわれは、普段でもこれに近い行動を自分自身に対して行うこともある。あるいは、他人があなたに対して行うのも経験したことがあるのではないだろうか。適切な行動を自分がとれた時にその行動に対して御褒美をあたえる。しっかりと集中して勉強が出来たから、ゲームの時間をいつもより多めにするなど。この時、強化子として使われるものは、イヌにみられるように直接その場でなんらかの要求を満たすもので無くてもよい。あるものを買ってあげるという約束でもよいし、ただ単なる褒め言葉でも正の強化子になりうる。

上述の方法は、適切と思われる行為に対して正の強化をあたえるというものであった。しかし、不適切と思われる行動をとめるために罰(嫌悪刺激)を用いることも良く見られる。この場合も、実物理的な苦痛(お尻をぶたれる)が用いられることもあるし、単なる叱責(なにやってるの。)である場合がある。ともかくも、その刺激が本人にとって嫌悪や苦痛をもよおすものであればよいということになる。

このような嫌悪刺激をもちいたコントロールの方法には3つの種類がある。逃避、回避、罰である。ある行動をすると嫌悪刺激を止めさせる(逃避、あらかじ

め嫌悪刺戟をさけることが出来る(回避)を考えてみよう。"ごめんなさい"の一言がお尻をぶたれるという嫌悪刺戟を止めることになる。また、怒りに満ちた母親の顔を見てふざけて笑わせようとする行動は、未然に母親からの叱責をふせぐ行動として学習されたものであろう。

この二つの場合を負の強化とよぶ。つまり、既にあるかこれから起こりそうな嫌悪刺戟から逃げるための学習である。

一方、罰の場合は、ある反応の後に嫌悪刺戟があたえられる。その刺戟が十分な強さをもっていればその行動はすくなくとも抑制される。しかし、罰は行動を抑制する強力な力をもってはいるが、場合によっては期待した効果をもたないばかりか、思わぬ副作用をもたらすことがある。罰は、様々な形で感情とむすびつく。罰をあたえた人物に対するうらみや自己否定感などと結びつくこともある。また、罰によって得られる行動の抑制は、罰をあたえる人がいる場面でのみ見られることが良くある。行動全般が抑制されたのではなく、罰をあたえそうな人がいる場面で行動を抑制することを学んだのである。また、体罰を加えることは、罰をあたえながら、一方でモデルを提示することとなる。他の子に乱暴をふるったとってその子をぶったとする。その子は体罰をあたえた大人に対して暴力をふるうことはないが、モデルとなる大人をみて学習した行動(人をぶつ)を他のこどもに対してやってみせることはありうる。

われわれは苦痛や嫌悪刺戟を避けようとするさまざまな努力をするだろう。親にしかられないよう悪い点数のテストを隠したことがあるという人もいられるかもしれない。では、もしあたえられる苦痛や嫌悪刺戟からどうしてもまぬがれないという状況にあったとしたらどんなことになるだろう。これについてつぎのような実験が興味ある事実をみせてくれる。

イヌが飛び越えられる高さのしきりによって二つに分かれた箱を想像してほしい。ベルでもなんでもよいが、ベルの音を聞かせた直後、イヌがいる方の区画の床から電気ショックが加える。しかし、もう一方の区画は安全である。この場合、イヌは数試行の中に学習をしてベルの音がすると安全な方に移動するようになる。ところが、もしこのイヌがこれ以前にどうしても電気ショックから逃れられないような状況を経験したとする。この経験をしたイヌは、上述のような状況におかれた時、かなしげに声をあげるのみで、適切な逃避反応を学習しない。しきりを跨がせて教えようとしてもむだであった。このような現象を学習性無力感という、自分の行動が外界をコントロールしえない、嫌

悪刺戟を回避することができないことを、まさに"学習によって"無力感を学んだのである。人間においても同じく学習性無力感が生じることが知られている。

2. 5 実体験によらない学習

以上のように環境や刺激が人の反応や行動におよぼす影響をみてきた。しかし、ある刺激はすべての人にとって同じような意味をもつとはかぎらない。ある人々にとって魅惑的な音楽が他の人々には雑音としかとらえられないかもしれない。バンデュースは社会学習理論の側面から人は自分自身の行動に対して制御を加える存在だとみなす。人びとは、外界の刺戟や環境をただそのまま受け取るのではなく、みずからの認知機能にもとづいて、その刺戟や環境を意味づけ、比較したり、対照したりをおこなう。この意味では、このような認知機能こそがわれわれと外界をつなぐ架け橋となる。このようにみなすとき、他者の行為やその結果をみることによって成立する観察学習や認知を変えることによって行動を変えることが可能となる。

2. 5. 1 観察学習

われわれは、みずからやって見なくても学ぶことは数多くある。友人がやるゲームを側で見ながら、攻略法をみにつけることも、観察を通しての学習である。また、友人の異性への声のかけ方や話し方をみて対人的なスキルを学ぶこともあるだろう。もし、やってみないことには学習できないとすれば、常に大きなリスクを負うことになるだろう。

2. 5. 2 認知的行動変容

われわれが外界と向き合う時に、さまざまな思考、言語やイメージがその仲介をしている。たとえば、複雑な工作模型を組み立てたドライブの計画を立てたりする時、「最初は、こうして、つぎに....」と言葉やイメージを使いながら計画をたてていく。

このようにわれわれには自分の思考を制御するスキルを有している。このようなスキルをオペラント条件付けの技術とむすびつけることで、行動を変えていこうとするアプローチがある。気分が落ち込んだりした時に、人は自分の行動や性格それまでのやり方について否定的に考えるだろう。「どうしてあんなことをしてしまったんだろう。どうせおれはだめだ。あんなふうにはすべきではなかった」このような形での思考は、自己肯定感を下げ、さらに種々の否定的感情と不適切な行動を引き起こす。このような状態から抜け出すためには、1.自己観察、2.拮抗的思考、3.変化についての認知という段階を必要とする。

自己観察では、自分自身の行動を注意をむける。この際、客観的な指標をつくり日記などにとどめておくといふ。その中に、その行動が生じた状況と結果、そして回数などを書いておく。たとえば、喫煙などをイメージしていただくとよいかもしれない。そのように自己の行動について記載しモニターするだけで、なにがその行動を引き起こしているのかを知ることが出来るかもしれない。

つぎには、現在の行動をあらたな行動や思考に置き換える必要がある。不安に対して「自分はだいじょうぶだ」と言い聞かせ、にっこりと笑ってみるといふような。最後に自分の行動を評価する。うまくいったのは、「自分がこういうふうに働きかけたからだ」と評価をする。人によっては、どんなにことがうまく運んでも、それは自分の行為や行動が原因ではなく、問題がやさしかったからとか運がよかっただけだとか思う人もいるかもしれない。しかし、これではあらたな行動の有効性を持続させることは出来ない。

2. 6 まとめ

このように考えてくると、われわれの行動は思っている以上に環境の要因に支配されていると思えるかもしれない。あるいは、おもった以上に人間とは自己を制御する内的な力をもっていると思われた人もいるかもしれない。内的な力や意志のどちらかだけが、われわれの行動を決定しているわけではない。外的な環境がどうしようもなくわれわれの行動を決定しているわけでもない。環境は行動に働きかけているし、行動も環境に働きかけている。環境と行動に対して制御をおよぼすことが可能であるし、その結果が自らを変えることにつながる。

3. 脳と自己

心理学の中では以上のように、外部環境によって実は人間行動が決定されている面があることを学習心理学という立場から明らかにされている。内的な力や意志と環境が関わりながら人間の行動は制御されているのである。

それでは行動の主体である我々自身とは何で、自己（私）の所在はどこであろうか。このような問いは非常に漠然としており、問いとしても古く、多くの先人達が様々な立場や角度から取り組んできたのである。私の魂、私の心の所在はどこか。それは心臓（ハート）である、肝である、頭である、と自己の所在を局在的に捉えらえ方であっても幾つかの見解があることをわれわれは日常感覚から知っているのである。しか

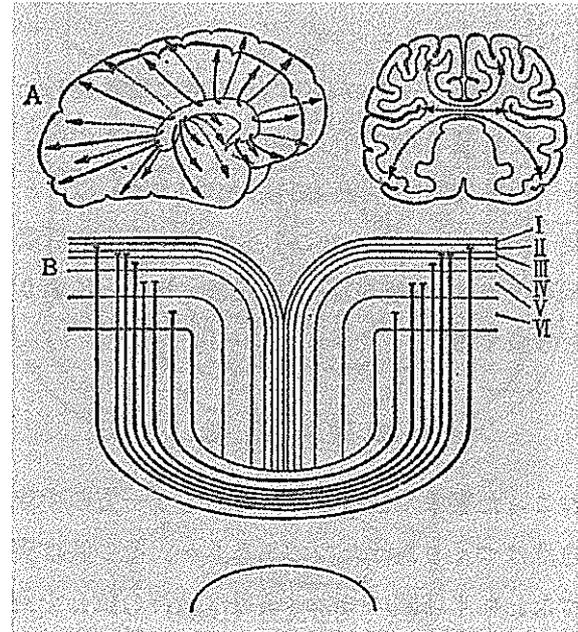


図1：ガザニガ（1994）

し、現代では自己の所在は心臓でも、肝臓でもなく、脳であるというのが一般的な見解となっており、それもまたわれわれの常識である。

これは現代の脳科学の進歩によって富に明らかにされてきたところであるが、この脳科学の進歩に伴って自己の所在についての複雑性もまた明らかにされてきたのである。それは移植医療からの臓器記憶、あるいはセマンティックマーカなどの用語からも推察されるように自己の局在性という観点から見ると対立するような事象が集積され、あるいは見解がまとめられつつある。ここでは、こうした自己の脳の局在性に対する挑戦的見解ではなく、様々な脳研究がある中で自己の所在について考えを深めざるを得ない知見をここでは紹介したい。

われわれが疑いようもなく一個の私と捉えているとらえ方がどこまで確かと言えるのだろうか。

3. 1 分離脳

ここで紹介する知見とは、分離脳に関わって得られた知見である。分離脳とは、われわれの脳は右脳と左脳からなり、それぞれが機能分担していることが知られている。それは、ウェルニッケ、ブローカなどの脳神経学者が19世紀後半に、生前言語障害を示した患者の解剖部検などから脳の言語的局在性に示唆を与え、もっぱら人間の言語活動が左脳に局在していることが知られるようになった。主に言語を中心とした研究から左脳を優位半球、右脳は目立った役割的証拠に欠けていたために劣位半球と名付けられた。

この左右両半球は内部で2億を超えるニューロンか

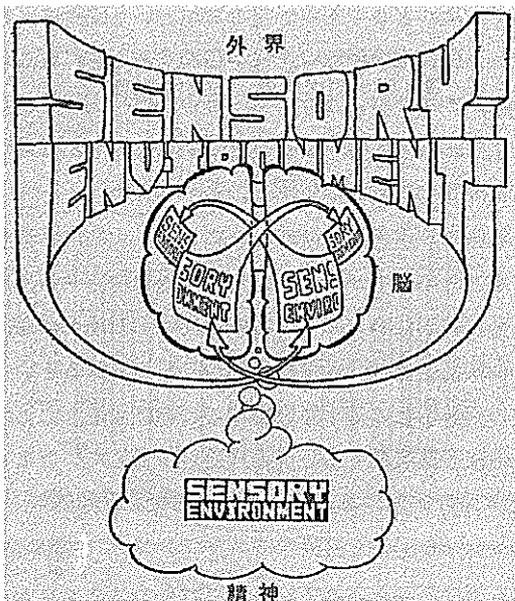


図2：ガザニガ (1994)

らなる脳梁によって結ばれている。そしてこの半球間繊維は両半球の同一領域を図1のAのように結合しており、Bのごとく一方の半球から出た半球間繊維は反対側半球の同じ皮質層にたどり着く。

この両半球をつなぐ繊維の大部分は感覚知覚機能を持つ領野同士をつないでいるので2つの領野間で情報の交換が生じると考えられる。空間の右半分に関する感覚情報はそのまま左半球に描かれ右半球は左半分に関する情報を受け入れる。これが半球間伝達によって一つの完全な心理空間の幻影を図2のように作り上げる機構であると見なされるのである。

よく知られているように1960年代に、てんかん発作の抑制にこの脳梁切断が有効だとされ、腫瘍などで切断された以外、多くのてんかん患者がこの脳梁切断を治療のために行った。治療のために行ったので本来は治療成績が問題となるわけだが、この手術によって、右脳と左脳の連絡が絶たれた状態、つまり一人の人に右と左に分割された脳が存在する状態が人工的に作られたこととなったのである。この状態を分離脳と言う。

3. 2 分離脳患者の示す特徴

分離脳となった患者は、自己と脳の局在性を考える上で大脳の左右半球に関わる非常に興味深い事実を残してくれた。つまり脳を二つにしたときに人間の意識のメカニズムが二重になるかという興味が起きてくる。この興味に対する研究が行われているので、ここではこれに関わる知見を紹介したい。

その前に理解しておかねばならないことは、視覚系の神経分布は片目に投射された情報が両半球へ同じように投射されるようになってきているということである。それゆえ情報を片半球だけに提示していることを保証

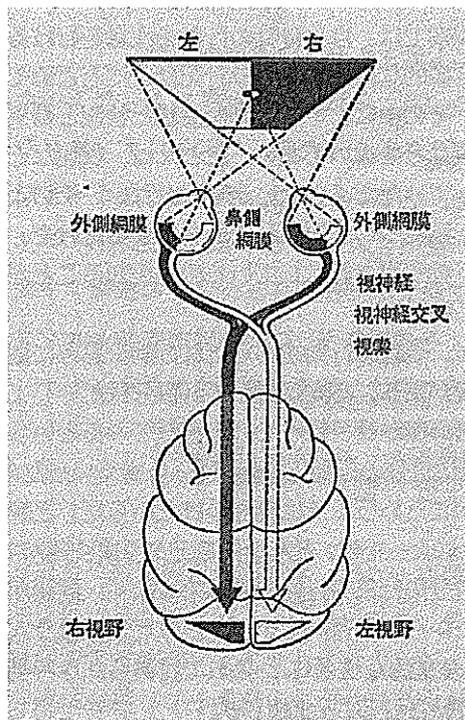


図3：ガザニガ(1994)

するためには被験者は一つの点に注視しなければならない。これによって図3で示すような解剖学的配置のように右視野に提示された情報は左半球へのみ投射されるのである。

3. 2. 1 分割意識

左半球の意識は言語活動によって現れてくるので捉えられるだろうが、右脳は果たして捉えることが出来るのか、また、どのような現れ方をするのか、右脳の言語的な特性と限界を明らかにする試みがなされている。

被験者はP.Sと名付けられた患者である。P.Sは言葉を話さない右脳に様々なものの絵を提示された。そして一連の文字から適当なものを選び順序よく並べて名前を綴るように求められたのである。この状況で彼は上手く文字を並べることが出来たことから、さらに右脳の主観的かつ個人的質問が行われた。

方法は、質問の中のキーワードに当たる部分だけを左視野に呈示され、右脳にだけ情報が投射されるようにしたのである。

「あなたは誰ですか」という質問に文字を正しく配列することが出来た。

続いて「あなたの好きな女友達は誰ですか」と質問されてP.Sは「Lits」と綴った。これは当時の彼のガールフレンドの名前であった。このようにキーワードを替えて「人」「趣味」「曜日」「仕事」と次々に質問された。「あなたのしたい仕事は何か」という質問に対して右脳は「自動車レース」と答えたが、しばしば彼は「製図家」になりたいと言っていたのである。

テスト直後に同じくどんな職業に就きたいかと質問されたとき彼は「えーっと製図家になりたい」と答えた。

ともかくこの実験から、劣位半球で主たる役割を持たない半球とさえ言われていた右半球も意識状態に値する性質を持っている、つまり自己の感覚を持っていることが示唆されるとされた。なぜなら右半球も名前を持っており、感情もあり、なりたい職業（この場合自動車レース）、つまり目標や夢を持っていると言えるからである。

さらに P.S に対して善悪判断も行っている。それは幾つかの単語を視覚的に右脳と左脳に呈示し、その後善いから悪いまで7段階評価をさせたのである。すると、概して右脳は左脳に比べ否定的な評価を下す傾向を示した。換言すると右脳と左脳は異なった意識の側面があることを示唆したのである。

好悪判断ではこのような右脳と左脳の違いははっきりと現れず、むしろ一致する傾向を示した。

3. 2. 2 行動を説明する意識

われわれは意識できることは僅かのことであることを経験上知っている。つまりわれわれは意識できること以上の活動に携わっているのである。それは、例えば力動精神医学、精神分析学が無意識の思考過程と呼ぶ心理過程を想定している。一般に右脳の思考過程は非言語的・非論理的思考過程であると言われ、また情動思考過程への関わりが深いとも言われる。つまり、確かにわれわれは意識が掴みきれない環境からの多くの刺激に常に曝され、さらにわれわれ自身の内部も情

動や夢想、貯蔵されている記憶が絶えず生起しているのである。こうした様々に生起する事柄を意識はつかみ取れなくともわれわれの行動に影響を与えている。

このようなことを考える上でも分離脳患者は示唆を与えてくれるのである。

P.S はどちらの半球に言語的命令を与えられても反応できるが、左半球に与えられた刺激に対しては言葉（発話言語）で表現することが出来る。

一連の研究の中には、右半球しか知らない命令に P.S が反応した際、なぜそうしたのかという質問に左半球がどのように対応するのか、その仕方に関するものがある。つまり左半球にどうしてそうするのか尋ねたときに、実際は知らない左半球がどのようにそれを説明するのかという課題に左半球は直面するのである。

図4はその状況を示している。

例えば「笑え」という言葉を右半球に呈示すると被験者は笑いはじめた。そこで理由を聞くと「だって、あなたは本当におもしろい人だ」と言った。「こすれ」という命令が呈示されると被験者は手の甲をこすった。そして命令は何だったのかを聞くと「痛い」と答えたのだ。「こすれ」よりも「痛い」というのは上手い説明になっているように思われる。「ボクサー」という言葉を呈示されたときには動作ボクサーの動作を示した。そして何を呈示されたのかを尋ねられると仕草を頼りにしながら「ボクサー」と述べたのである。

また、タキストスコープで検査された別の分離脳女性患者は、中性的な幾何学図形の中にヌード写真が紛れ込んでいて右半球に投射されると、その女性は顔を



図4：ガザニガ(1994)

赤らめくすすくと笑い出した。そこで「何を見たのですか」と尋ねると「いえ、フラッシュだけでした」と答え再び口元を押さえて笑い出したので「どうしたのですか」と尋ねると「先生、先生は何か仕掛けましたね」と答えたのである。

これは示唆的である。つまりもしも分離脳患者と知らなければ、初めの例では精神分析学的立場から見るとこの患者は、本当のことを抑圧したと捉えられるであろうし、女性患者は葛藤をもたらす性的材料の知覚を抑圧した典型的な行動ととらえるであろう。そうでなくとも表現を避けたと捉えるに違いない。

分離脳患者ではなくとも、健常者にも同種の行動がみられる。それは例えば、相手が仮に口では「あなたを好きよ」と言いながら顔の表情は「嫌いだ」ということを示している場合、左脳は言語を理解できるが、右脳は言語を容易には理解できないので非言語的メッセージを強調して受け取ることになる。このとき論理的な思考を行う左半球によって右半球の受け取ったメッセージは切り取られることになるかも知れない。もしも相手が「嫌いよ」と言って表情や仕草が「好き」ということを現しているときも同じことが起きる可能性がある。

また、右脳は行動制御に関わることは出来ても言語的にその行動を説明するのは左脳である。左脳は自らの行動の理由を知らなくとも行動を解釈し言語的かつ論理的に説明しようとするようである。つまり本当の理由がわからなくとも左脳は行動の論理的な説明を与えようとする傾向があることを分離脳患者は教えてくれている。

3. 3 自己の所在

こうした右脳についての意識の調査をするためには右脳が言語表出できることが必要である。しかし、例えば 27 例の分離脳患者のうちでこうした言語表出が出来るのは 2 例だけであったという。

つまり 2 例は右半球は独立した意識を持っていることを示した。多くの分離脳患者は右半球の言語的に洗練した性質は欠如しているという事実もあるのである。それゆえ右脳は独立した意識を持ちうるということが示されたのであって、全ての人が同じように左脳と右脳が独立に意識を持ちうる証拠が得られたことにはならない。

しかし、右脳は言語を持たなくとも非言語的情報を受け取り、メッセージとして解釈し判断する能力を持っていることは示されている。例えばそれは、血管造影が行われるときに使われるナトリウムアミタールによって左脳が眠らされているときに、左手にものを持



図5：ガザニガ(1994)

たせ、何を渡したかに言語では答えることが出来なくても、図版を見せられると与えられたものを選び出すことが出来るという事実に見ることが出来る(図5)。

われわれは、自己の所在を脳に局在化して捉えるが、脳の機能は左右同一ではないばかりか、異なる意識が併存している可能性も分離脳から示唆されるのである。先の例の P.S は特別な例かも知れないが、左脳と右脳では同一対象に対する好悪の判断は概ね一致していたが、善悪の判断は異なっている傾向が示されていた。

また、こうした分離脳患者でなくとも左右半球の機能的分割がある事実は、左右半球が外界から受け取るメッセージの質が異なっている可能性を示唆し、異なる質のメッセージ解釈が同居している状態が作られ得る。

そして左脳に言語機能が局在化しているので、われわれが言語的に外界のメッセージを解釈し、それに即して行動しようとするときには、言語的判断に偏って判断を下す傾向が強くなる可能性を示唆する。しかしそれは、非言語的なメッセージに対する右脳の解釈と矛盾する可能性を常にはらんでいる。善悪判断という点では特に、左右の判断が異なっている傾向があったことは、患者の個人的な傾向だったのだろうか。よく漫画チックに天使と悪魔が耳元で対立したメッセージを送る描写があったが、右脳と左脳の善悪判断が異なっていた結果から考えてみるとこれも興味深い。

3. 4 まとめ

私たちは通常自己を一つと捉え、自己の所在は局在的には脳であると疑いなく思っている。しかし、左右両半球の特性あるいは分離脳患者の行動的な特徴から、自己の所在としての脳それ自体は必ずしも一つではなく、左右両半球の機能的な差異やさらには異なった意識状態を持つ可能性までもが示唆されているのである。

一般に言語を持たないとされる右脳と言語表出力を持つ左脳は、異なった外界の解釈及び自己の行動認知を行いながらもそれが統一された矛盾のないものであろうと解釈を試みようとしているように見えるのである。言葉を持たないが言葉を持つ左脳とは異なった解釈に基づいて行動制御する右脳と、現れてきた行動に論理的な解釈を絶えず試みようとする。そうみると人間は常に矛盾と格闘する宿命を負っているように見えるのである。

4 おわりに

われわれがほぼ無条件に信じている自分自身についての確証は幾つあることだろう。自分は一人であり、自分は元々こういう人間だ。自分の行動は自分が律している。自分のことは自分が一番よくわかっている。数え上げればきりが無い。ここで示した行動理論、条件付け、社会学習理論、分離脳の知見は、これらの確証に対する挑戦であるように見える。つまりこうした確乎たる自己というのは存在せず、外部刺激の連鎖、環境条件や社会的な強化の積み重ねでいかような自分にもなり得たのではないか。自分の行動は実は全く私の与り知らぬ何らかの理由から起きてきたものなのではないか、という疑念が湧いてくるのではないだろうか。しかし、一方でこの事実はどこまで可能かという程度についての検討は別にしても自己の可塑性、柔軟性、あるいは自由度の高さを示すものと捉えることも出来るのである。

一見矛盾した意識を持つかのように見える左右両半球が統体としての自己を作り上げようとする営みに本来の私らしさがあるのかも知れない。

参考文献

- (1)P.G. ジンバルド一,現代心理学I, サイエンス社 (1988).
- (2)リタ.L.アトキンソン・リチャード.C.アトキンソン・エドワード.E.スミス・ダリル.J.ベム・スーザン.ノーレン-ホークセマ,ヒルガードの心理学,ブレーン出版,(2002).

(3)M.S.ガザニガ・J.E.レドゥー,二つの脳と一つの心 左右半球と認知,ミネルヴァ書房,(1994).

(4)D.A.ベイカル,病氣と痛みの心理学,新曜社,(1983).

(5)杉下守弘,意識とは何か?(4),現代思想4,青土社,(1984).

